

石?文庫収蔵書簡に見る仏英調査旅行関連資料について

その他のタイトル	A description of Dunhuang manuscripts research at London and Paris found in the letters held by the Ishihama Collection, Osaka University Library
著者	玄 幸子
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	53
ページ	117-128
発行年	2020-04-01
URL	http://doi.org/10.32286/00020437

石濱文庫収蔵書簡に見る仏英調査旅行関連資料について

玄 幸子

石濱純太郎博士については本研究所の実質的創立者であり第二
代目所長でもあるので贅言を避ける^①。また博士旧蔵の約四万二千
冊に及ぶコレクションが大阪大学付属図書館に石濱文庫として収

蔵されていることも周知の事実である。さて、近年一部デジタル
データとして公開されるものこのコレクションには多くの未整
理資料が収蔵されている。大阪大学付属図書館、そして石濱文庫
整理に長らく尽力されている堤一昭教授（大阪大学大学院文学研
究科）の協力を得て、昨年年初からこの未整理資料の書簡につい
て調査を始めた。さらに同年四月からは本研究所委嘱研究員であ
る高田時雄京都大学名誉教授（復旦大学特聘教授）にも参与いた
だいて現在ほぼ月一回の割合でクリアファイル二〇冊に収められ
ている書簡の調査を進めてきている。膨大な量とその内容の厚さ
に改めて石濱純太郎博士の学術交流の広さと学問の深さに圧倒さ
れる。この書簡資料を通じて当時の東洋学斯界の状況がありあり
と再現され、新たに知りえた事柄も多く、毎回回を追うごとに大

いに興奮を覚えることとなっている。いずれきちんと整理して公
開する予定であるが、各方面に大きな波紋を及ぼすであろうと調
査が進むにつれますます期待も大きくなる。

本稿ではこれまでの調査結果の中からそのごく一部を取り上げ、
内藤湖南に随行した大正13年から14年にかけての英仏敦煌文献調
査旅行に関連する書簡を検討する。現時点で確認できた関連資料
としてまとまっているものは、松本信廣の石濱純太郎に宛てた書
簡と、石濱純太郎自身が欧州への途上に伏見丸の船中から留守宅
の家族へ送った書簡とがある。それぞれ非常に興味深い内容であ
り、順を追って以下に紹介する。

一 松本信廣の書簡

松本信廣（一八九六一一九八一）は慶応大学史学科を出た後フ
ランスへ留学、ソルボンヌ大学などで聴講していた時に松本重彦
の勧めで内藤湖南一行を尋ねて許されパリでの調査に同行したの

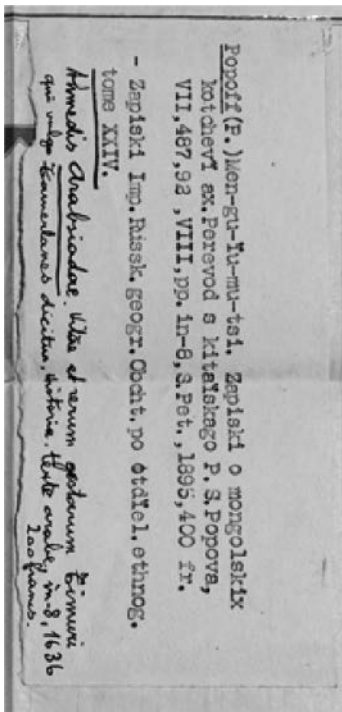
ち、湖南一行が帰国した後の資料写真撮影の任を引き受けている。この間の事情は、「巴里における内藤先生」⁽⁴⁾に自身の回想として詳しく述べられている。

また、写真撮影の経過を報告する内藤湖南宛て書簡が三通残されているが、その詳細については高田時雄名誉教授の「内藤湖南のヨーロッパ調査行」に紹介されている⁽⁵⁾。次に併せて考察してみよう。ここに紹介するのは、全三通の書簡である。まず、その全文を時系列に沿って校録する。

【その一】 一九二四年十二月三日 パリより (2189)⁽⁶⁾

伊太利の旅は如何でしたか ムッソリーニに歓迎されましたか

グラネー氏に依頼された名刺を此處に挿入いたします、なほ



グートナーから次の本をあなたに売りつけるやうたのまれましたから此處にはりつけて御送りします。此紙の下にペリオ氏の名が書いてありました。同氏が本を売りだしたらしいのです。あなたがもつとパリーに居ればよろしいのに。私は蒙古の研究者ではないから此種のを買はぬとグートナーに宣言してをきました。しかしアラビヤ文のチムール史はあなたが買はないと欲しい気がします。然しアラビヤ語は當分手をつけませんからあなたが御買ひになりませんか

圖書館の仕事相不変つゞけております。タオイスト、ノン、イデアンチヒフイエとある本(マヌスクリ)⁽⁷⁾の中から老子の本文をみつけペリオ氏おそるるにたらずと生意気に思ひました。

もしタイプライターでマヌスクリ目録をおうちのおりは一通私にも御わかち下さいませんか。重ねて御願ひしてをきます。圖書館で私の寫した文書類に誤字が多いだらうとおもひますが、

今気づいてゐるのは 戸籍の中の畠という字を自由とうつしたことです、御みあたりのせつはなほしてをいて下さい。先生に御ねがひすべきですが間接にあなたに御たのみいたしておきます大阪では重彦大兄とネフスキー氏によろしく。⁽⁸⁾

フランマリオンから貴方にむけフォークローアの先日御たのみの本を、近日中に送らせます。代金はおあづかりの分から頂戴してをきます。内藤先生にも申し上げましたがロートグラフが不鮮明で残念です

十二月廿三日

それではまた

松本信廣拜

石濱純太郎様

【その二】 一九二五年二月二六日 パリより (1929)

大変御無沙汰いたしました 其後御変りありませんか ロー
トグラフ作業遅々として進行してをります ルマールがなか
仕事せぬのでジロードンにたのみペリオ氏宅を片づけました 代
價は二倍ですがポジチブにしてくれるのできれいです 見本は
内藤先生の宅で御覧ください 此方が御気にめせばジロードン
にたのみ すぐ圖書館のものにとりかゝりませう。少し内藤先
生のより型を少くしてはいかゞですか、ペリオ氏の西夏文字は
寫真にしてジロウドンからフ井ルムと共に送らせました 價は
百五フランです

シルバン・レビ氏のクツチャ語に出てみましたが、むづかし
いので逃げだしました。(サンスクリットで譯すのです)も少し
たつてから出ます。レビ氏の御世辞の好いのに驚きました。
この講義には西本願寺からの山田文学士がでてをり、知り合ひ
になりました。百法纂要をうつさせたのは此人です、此人が、
印度人の學生で中亜を研究するものから、日本語でかゝれた中
亜研究資料をきかれたとかで、私に問はれましたが、私より貴
兄の方が委しいことゆえ、まことにすみませんが、中亜研究に
関する文献の簡單なリストを御ひまのをり御送りくださいませ

石濱文庫収蔵書簡に見る仏英調査旅行関連資料について

んか 御ねがひいたします 該印度人と山田君と私の三人のた
めに。山田君からは萩原氏の梵語學を借用したものですから少
し恩を歸せられましたのです

ペリオ氏最初文書をかしたすのに機嫌わるかつたのに先生の
書信ことに詩を手にしてから ばかに機嫌よくなりました 先
生の詩が かくも効果あるにおどろきました どんな出来榮
えのものだったのですか、支那學上にでも発表せられませんで
せうか

このごろブルンスキイ氏の講義がおもしろくなりました
てをります、印度支那、ことに安南語の音韻變化を比較文法上
から講じてをります 聴講者は小生をいれてたつた二人、
ネフスキイ氏の御近況はいかゞですか 昨日グートナーにゆ
きました所 例の先生ムッシュ・イシハマはもうついたらう
かなどとき、ました 金がなくなつて もう 古本あさりもい
たしません、

それではまた

二月廿六日

松本信廣拜

石濱純太郎様

【その三】 一九二五年六月二六日 パリより (1925)

大変ご無沙汰いたし申しわけありません かつ大変延引いた
しましたが本日漸く二〇三九、二七一五、二三二九、二六七四

一一九

の四種をジロウドンから発送させました 殘金三三三〇フランをグートナーに拂ひこみました左の如くなりませす

	(入)	3910,00
	(入)	1000,00
	(出)	888,00
華夷譯語		
wieger, gennejz		133,75
(缺けた分は絶版)		
西夏文		117,00
f		
(實際は129ですが三つやきつけし一はペリオ氏にあげ一は私がもらひました。私の分は自辨します) どうぞ御ゆるしてください		
文書四種	ロートグラフ	530,00
		7,50 税
差引		3233,75
計算	まちがいで3フラン75はグートナーにりませんでしたこれはブルアルで私にください	

中亞文献目録は まことに有難く頂戴いたしました 早速山田君にうつけせました 厚く御禮申し上げます 今後も どうぞ御手すきのとき 敦煌學近況を御しらせ下さい 国學季刊は欲しいのですが 今 儉約中で残念ながら 買えません 沙州文録は 寫眞でございませるか活字印刷でございませるか 例の戸籍は内藤先生の折 失敗し、も一度ジロウドンにうつけせたいと思ひませす それを一寸御しらせねがひたいのですが如何でせうか。なほもし文録の方の戸籍の初めの行 あとの行でもわか

れば ことに 好都合と存じます、今山田君が約四十佛典をルマールに命じて複製中です 和田さんは パリー一週間でロンドンにゆかれてしまひました 私もしばらく圖書館を御無沙汰してをりました この休中 ひまをみて 慶應からのまれた複製を 少しやらうかとおもつてをります いそがしいので閉口です エリセイフ君も元氣です 山田君と共に同君についてロシア語をはじめましたがものになりそうもありません ペリオ氏はロシアにゆき 朱學年は半分コロンビヤにゆくとか うはさとりくです ロシヤではカゾロフ将来匈奴遺品をみるつもりでせう パリーにはアロカン氏が歸つてきました

松本信廣 拝

六月廿六日

*ルマールとジロードンの領収書を各一枚同封。

以上が書簡三通の全文である。【その一】に見える重彦大兄は「巴里における内藤先生」(前掲)で言及される「松本重彦君」の事であろう。回想によれば新設される大阪外国語大学のアラビア語の教授になるため松本信廣より少し前にパリに在外研究員として派遣されており、同じくルー・ダッサスの下宿に滞在することにしたという。前述の通り、湖南との出会いはこの人物によるところが大きかった。

【その二】に言及されている「先生の詩」は内藤湖南の詩である。内藤湖南に宛てた同日の書信にも同内容を記している。前掲の高田時雄「内藤湖南のヨーロッパ調査行」では、この詩について詳しく考察し、ギメ東洋美術館所収の湖南自筆のペリオに贈った律詩十五首の「呈伯希和翰林第十三疊韻」がそれであると考証している。その詩を次に再録しておく。

廿年望盡大秦雲 巖壁訪書真駁聞

東被藏乘十二部 西昇道德五千文

崑崙偏籍漢皇定 兵索渾須楚史分

學術如今泯眇域 大師中外獨推君

【その三】でパリ一週間でロンドンに行ってしまった「和田さん」は『中国史概説』（岩波全書）の調書などのある東洋史学者和田清（一八九〇—一九六三）の事であろう。回想のなかでも「京都に遊学せよと忠告」した人物として述べられている。

ジロードン (Giraudon) およびルマール (Lemare) はパリ第六区にあった写真館である。その仕事ぶりについても、湖南への書簡に同様の報告が見える。また、両写真館の同様の伝票及び領収書が本学図書館内藤文庫所収の松本書簡にも添付されている。文中出現するグートナーは内藤湖南『航歐日記』¹⁰にはギュートナーとみえる書店であろう。

内藤文庫に収蔵される資料写真およびポートグラフはインターネット上で公開すべく現在整理を進めているが、今のところこ

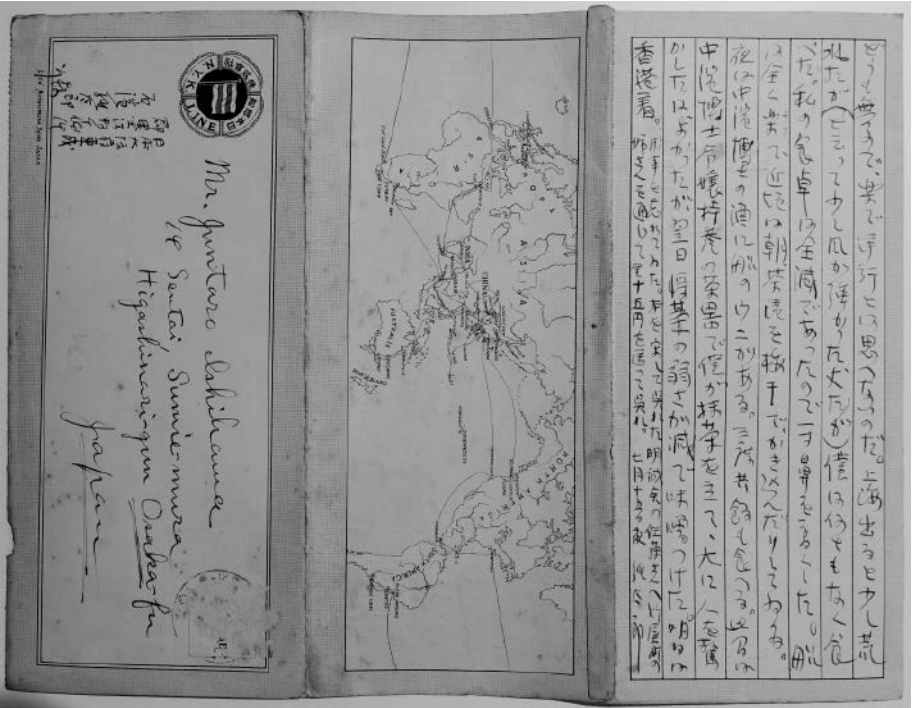
に挙がっている二〇三九、二七一五、二三二九、二六七四に関してはその詳細を確認できない。石濱文庫未整理資料中に見いだせることができればと期待するばかりである。

二 石濱純太郎の書簡

ここでは、欧州旅行に使用した日本郵船 (Nippon Yusen Kabushiki Kaisha) 伏見丸の船内から自宅へ向け発信した三通を取り上げる。NYKの歴史は横浜にある日本郵船歴史博物館で、展示品と共にその詳細を確認でき、石濱純太郎が使用した便箋型メニューの復刻版もミュージアムショップで一部販売されている¹¹。石濱一行が乗船した当時は、郵便業務も行っており、船内で便箋型メニューに記した書簡をそのまま郵送することができたのである。

この便箋型メニューは、メニュー面を内にして文面が中になるように三つ折りにして宛名を書くようになっており、封筒裏が航路図になる。次に、開封して一枚に伸ばした状態で撮った写真を掲載する。

まず、便箋面の写真の下に録文を示す。メニュー面は後掲する。メニューには日付まで明記されており、これにより書簡を記した夕食のメニューがどのようなものであったかまで知ることができ



Mr. JunTaro Sakihama
 1st Santa's Summit-mura
 Higashimurayama Osakafu
 Japan

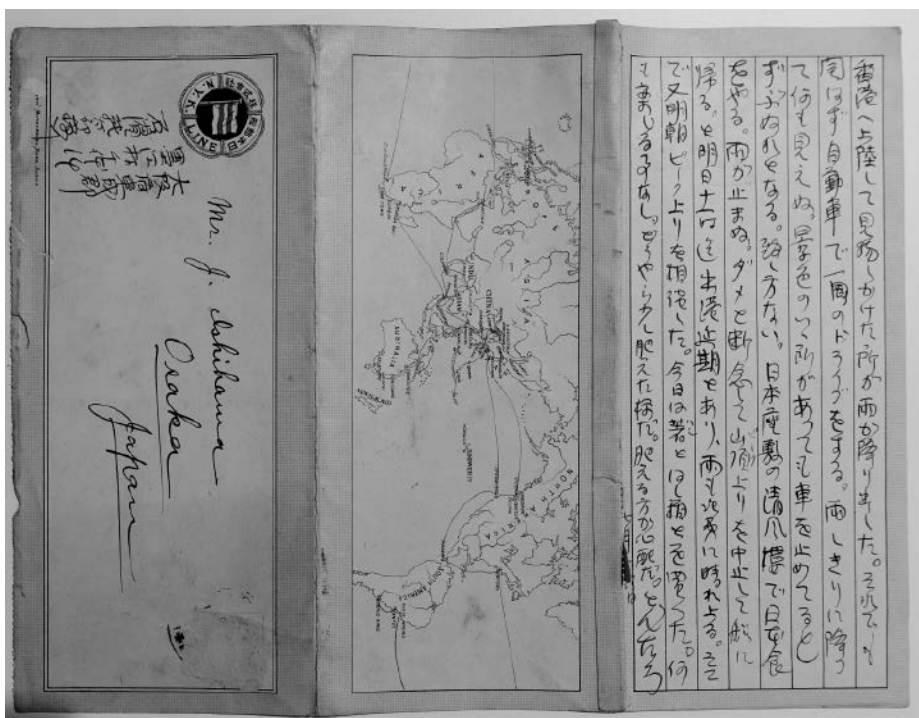


どうも無事で、楽で洋行とは思へないのだ。上海出ると少し荒
 れたが（と云って少し風が強かった丈だが）僕は何ともなく食
 べた。私の食卓は全滅であったので一寸鼻を高くした。船
 は全く楽で近頃は朝、茶漬を梅干でかき込んだりしてゐる。
 夜は中濱博士の酒に船のウニがある。三度共飯も食へる。此間は
 中濱博士令嬢持参の茶器で僕が抹茶を立て、大に人を驚
 かしたは、よかつたが、翌日将某の弱さが減で味噌つけた。明日は
 香港着。

一九二四年七月十五日 書簡

どうも無事で、楽で洋行とは思へないのだ。上海出ると少し荒
 れたが（と云って少し風が強かった丈だが）僕は何ともなく食
 べた。私の食卓は全滅であったので一寸鼻を高くした。船
 は全く楽で近頃は朝、茶漬を梅干でかき込んだりしてゐる。
 夜は中濱博士の酒に船のウニがある。三度共飯も食へる。此間は
 中濱博士令嬢持参の茶器で僕が抹茶を立て、大に人を驚
 かしたは、よかつたが、翌日将某の弱さが減で味噌つけた。明日は
 香港着。

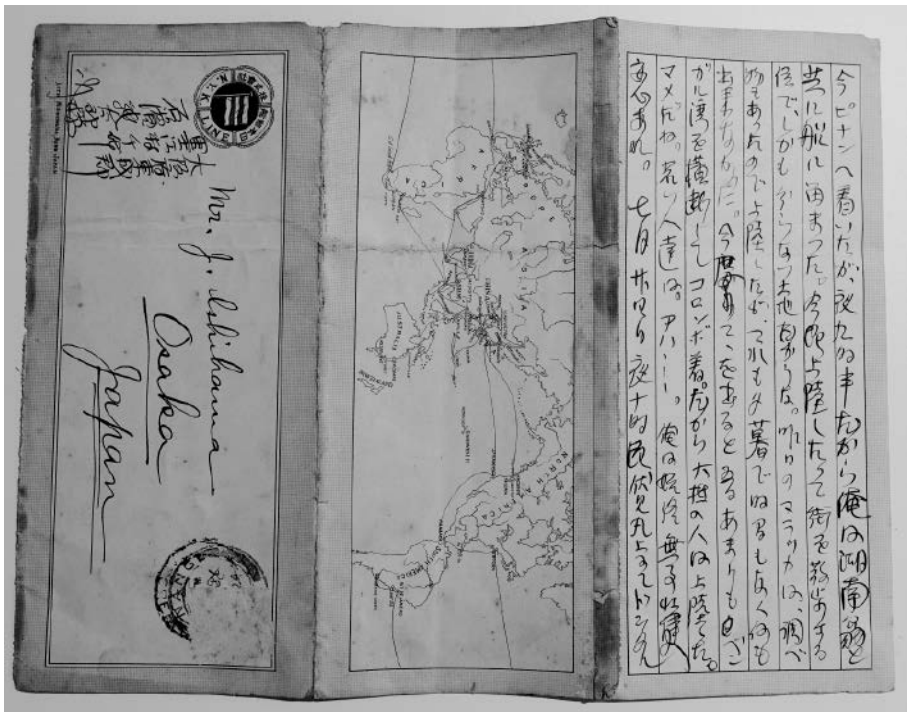
（用事を忘れていた。本を寄して呉れた明誠会の佐藤さんへ竹屋町の
 姉さんを通じて金十五円を送って呉れ。七月十五日夜 純太郎¹²）



香港へ上陸して見物しかけた所が雨が降り出した。それでも
 何はず自動車で一周のドライブをする。雨しきりに降つ
 て何も見えぬ。致し方ない。日本座敷の清風樓で日本食
 をやる。雨が止まぬ。ダメと断念して山頂上りを中止して船に
 帰る。と明日朝ヒーク上りを相談した。今日は箸とはし箱とを買った。何
 も案じる事なし。どうやら少し肥えたようだ。肥える方が心配だ。
 どんたる 七月十六日

一九二四年七月十六日 書簡

香港へ上陸して見物しかけた所が雨が降り出した。それでも
 何はず自動車で一周のドライブをする。雨しきりに降つ
 て何も見えぬ。景色のいい所があつても車を止めてると
 ずぶぬれとなる。致し方ない。日本座敷の清風樓で日本食
 をやる。雨が止まぬ。ダメと断念して山頂上りを中止して船に
 帰る。と明日朝ヒーク上りを相談した。今日は箸とはし箱とを買った。何
 も案じる事なし。どうやら少し肥えたようだ。肥える方が心配だ。
 どんたる 七月十六日



今ピナンへ着いたが、夜九時半から俺は湖南翁と
共に船に留まった。今頃上陸したって街を散歩する
位で、しかも分らない土地だからな。昨日のマラッカは、調べ
物もあつたので上陸したが、これも夕暮で時間もなく何も
出来なかつた。今度こゝを出ると五日あまりもベン
ガル湾を横断してコロンボ着。だから大抵の人は上陸した。
マメだね。若い人達は。アハ、、、俺は始終無事壮健
安心あれ。七月廿四日夜十時頃。伏見丸上ル(に)て

一九二四年七月二十四日 書簡

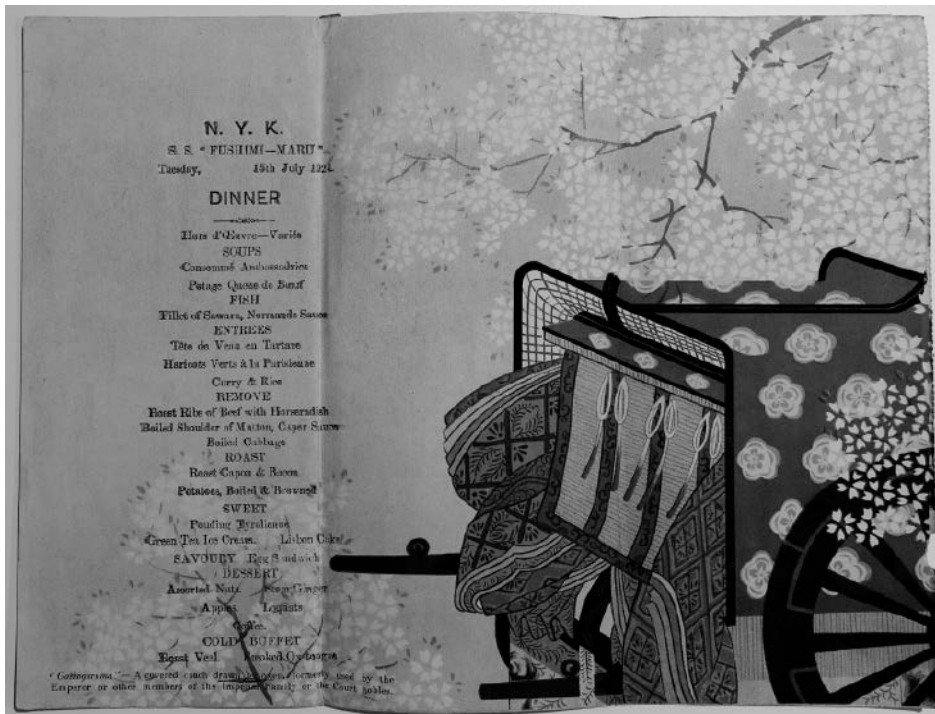
今ピナンへ着いたが、夜九時半だから俺は湖南翁と
共に船に留まった。今頃上陸したって街を散歩する
位で、しかも分らない土地だからな。昨日のマラッカは、調べ
物もあつたので上陸したが、これも夕暮で時間もなく何も
出来なかつた。今度こゝを出ると五日あまりもベン
ガル湾を横断してコロンボ着。だから大抵の人は上陸した。
マメだね。若い人達は。アハ、、、俺は始終無事壮健
安心あれ。七月廿四日夜十時頃。伏見丸上ル(に)て

以上香港到着前日、香港到着日、ピナン到着の三日間の書簡を取り上げたが、非常に筆まめな方だったようで、恐らく同様な書簡を多く記したものと思われる。今後書簡の整理が進む中で、同様の書簡をさらに目にする機会があるかもしれぬと大きく期待される。

また同年八月二四日付の甥の（藤沢）恒夫の石濱純太郎宛の書簡に、西村天因の計報を伝える文面と共に、「淡路で汽船会社からの伏見丸八月十七日マルセイユ安着の報に接しました。一同、安心しました。この手紙はどこでお手に這入るのでせうかしら？」とあり、同書簡に「昨日一同歸坂いたしました。」ともあるので、八月二十三日の帰阪前に淡路で十八日マルセイユ到着の知らせを汽船会社から受け取ったことが知れる。当時日本郵船から留守家族のもとに目的地到着を知らせるサービスがあったのであろう。

便箋型メニューのメニュー欄の写真を次に掲載する。日付を併せて確認されたい。

七月十五日メニュー面



* Cataplasma. — A ground (and dried) powder, formerly used by the Emperor or other members of the Imperial Family, or the Court ladies.

N. Y. K.
S. S. "FUSHIMI-MARU"
Wednesday, 10th July 1924.

DINNER

Hors d'Oeuvre—Variable
SOUPS
Consommé Dario-Morbo
Potage Crème d'Avon
FISH
Dolled Turbot, Sauce Maître d'Hotel
ENTREES
Quais de Boeuf au Haricots
Spinach au Jus
Curry & Rice
REMOVE
Roast Haunch of Mutton, Mint Sauce
Baked Bacon with Cabbage
Fried Eggplant
ROAST
Roast Capon, Dress & Stuffing
Potatoes, Baked & Browned
SWEET
Winchester Pastry
Apricot Sorbet, English Fruit Cakes
SAVOURY Cheese Ribbon
DESSERT
Assorted Nuts, Chow Chow
Apples, Bananas
Coffee.
COLD BUFFET
Roast Beef, Bologna Sausage

Kashigawa in the northern province of Kyushu. This spot is highly popular in summer as the electric fan selling the clear stream of the Sogawa flowing around the hillside covered with cherry and maple trees, which presents a truly lovely sight during their respective seasons.

N. Y. K.
S. S. "FUSHIMI-MARU"
Wednesday, 23rd July 1924.

DINNER

Hors d'Oeuvre—Variable
SOUPS
Consommé à l'Africaine
Potage Tim de Veau
FISH
Dolled Scorf Fish, Bechamel Sauce
ENTREES
Lamb Chateaux with Jardinière
Lack au Jus
Curry & Rice
REMOVE
Roast Rib of Beef with Horseradish
Baked Corned Pork with Potato Pastry
Vegetable-marrow
ROAST
Roast Capon with Lettuce
Potatoes, Baked & Browned
SWEET
Pasting Souffle à la Chokolat
Pine-apple Ices, Walnut Marsh-marrow
SAVOURY Cheese Pie Cakes
DESSERT
Touzaches, Mandarine
Assorted Nuts, Sien Ginger
Coffee.
COLD BUFFET
Game Pie, Bologna Sausage

Kinokuniya Garden (resembling) in the N. W. suburbs of Kyoto, a rare specimen of Japanese architecture and atmosphere, noted by the Ashikaga Period (1420-1603). Its effect when surrounded is most celebrated.

調査途中の現状では、数通簡単に紹介するのみに終わらざるを得ないが、この数通をもってしても資料の面白さを十分に実感できるといえよう。現在目録作成中であるが、目録作成後に資料を選別し、重要なものから写真に収めて、いずれ公開する予定である。

幸いなことに本研究所内からは陶徳民教授、長谷部 剛教授、高田時雄委嘱研究員、学外から堤一昭大阪大学教授にメンバーに加わっていただき二〇二〇年度から二年間「内藤文庫および石濱文庫所蔵資料の調査と整理に関する共同研究」の課題で学内経費を頂戴できることになった。本稿は今後の研究活動を見据えての簡単な研究ノートである。

注

- (1) 二〇一八年十月二十二日には石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウムが開催され、東西学術研究所研究叢刊59として論文集『東西学術研究と文化交流』（関西大学出版部二〇一九年十一月）が出版された。
- (2) <https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/list-osak-shihana.html>
（大阪大学附属図書館「石濱文庫 画像一覧」）
- (3) 書簡一通につき仮番号がふられており全三三三八通であるが、空番号も含まれるので調査が終了していない現在ではあくまでも概数である。
- (4) 『内藤湖南全集』（月報2）1969. 6初掲、1996. 12再掲
- (5) 『内藤湖南敦煌遺書調査記録統編―英佛調査ノート』（東西学術研究所資料集刊41 関西大学出版部 二〇一七年三月）所収 11～12頁
- (6) クリアファイル所収書簡に付された整理番号。以下同じ。
- (7) () 部は行間右に挿入して書かれている。
- (8) 使用する原稿用紙がここで以下切り取られ、次に続く末文はやはり

石濱文庫収蔵書簡に見る仏英調査旅行関連資料について

原稿用紙断片に記されている。原稿用紙半頁10行のうち前半8行後半6行の断片であるので、中間6行分が何らかの理由で切り取られたものと思われる。

- (9) () 部は行間左に挿入して書かれている。
- (10) 『内藤湖南全集』第六卷所収
- (11) 日本郵船HP <https://museumnyk.com/index.asp>
- (12) () 内は、余白がなくなったため双行で書かれている。
- (13) 石濱文庫クリアファイル番号2032
- (14) 二〇二〇年度研究拠点形成支援経費（関西大学）

【謝辞】

資料の影印を許可くださった大阪大学付属図書館に厚く御礼申し上げます。

A description of Dunhuang manuscripts research at London and Paris found in the letters held by the Ishihama Collection, Osaka University Library

GEN Yukiko

This article introduces some of the unpublished letters from Ishihama Bunko. These letters are related to Dunhuang manuscripts research at London and Paris where Ishihama (石濱) went with Naito Konan (内藤湖南) from Taisho13 (1924) to Taisho14 (1925). Nobuhiro Matsumoto(松本信広)'s letters describe the actual situation of the acquisition of the photos and rotographs of the Dunhuang manuscripts, while Ishihama's letters detail the situation of the cruise on Fushimi Maru(伏見丸).

キーワード：石濱純太郎 (Juntaro Ishihama)、石濱文庫 (the Ishihama Collection, Osaka University Library)、敦煌文献 (Dunhuang Manuscripts)、松本信広 (Nobuhiro Matsumoto)、未公開書簡 (Unpublished letter)